
戦国BASARA × 恋姫無双 中原に羽ばたく雑賀黒鳥

dorakon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国BASARA×恋姫無双 中原に羽ばたく雑賀黒鳥

【Nコード】

N2898W

【作者名】

dorakon

【あらすじ】

この作品は、TINAMIでも投稿させて頂いています。戦国BASARAの雑賀孫市が真・恋姫十無双の世界にトリップします。基本的に蜀ルートで進行していきますが、一刀は今のところ出す予定はありません。誤字・脱字報告があれば感想にて報告いただければ幸いです。

設定（前書き）

初めまして。

こちらでも連載させていただきます。

*2011年9月2日加筆・修正

設定

煙鳥翔華 雜賀孫市

武器：八咫烏 山吹、シヨットガン、マシンガン、
マグナム

狙弾力ワセミ（ロケットランチャー）

年齢は主要な登場人物の中で高め（黄忠より2つ下程度）

日ノ本一の傭兵集団、雑賀衆の三代目頭領。

常に沈着冷静であり、己の誇りを貫こうとする。

本能寺にて織田信長を斃した直後、光の濁流に吞まれ姿を消す。

今回はタグに入れていませんでしたが、舞台は真・恋姫無双の蜀ルートです。

番外編として元親と家康の話もたまに書いていきたいと思っています。
戦国BASARAのキャラクターはこの3人以外は出さないと思います。

一刀は… たぶん出ません。

また、キャラクターの性格が一部違う点が出てきてしまうかもしれませんが、

その点はご了承くださいと思います。

*追記：この作品の孫市はDSです。

**DSのSは親切とサドのSです。

設定（後書き）

こんな孫市さんで行きたいと思います。

プロローグ（前書き）

まずはプロローグです。

ブローグ

本能寺

「泣くな…私よ…泣くな…！」
俯いたまま、絞り出すように口にした。

魔王は斃れた。雑賀衆三代目雑賀孫市の手によって。

孫市にとって、雑賀衆にとって魔王打倒は悲願だった。
石山本願寺にて二代目雑賀孫市を弔った日から。

その日から、孫市は本当の名を捨て、雑賀衆の頭領となった。
もう果たされることのなかったはずの敵討ち。
本能寺の変で、家臣だった明智光秀の謀反で地獄に落ちた織田信長は、

正真正銘の魔王として蘇った。

孫市は、魔王復活の報を聞き、直ぐに東軍を抜けた。

己の感情のままに本能寺へ赴き、魔王を斃した。

それは、「雑賀孫市」のみ知る者なら理解できない行動だったかもしれない。

「サヤカ…！」

「孫市…！」

自分と呼ぶ声を聞き、孫市は顔を上げた。

そこには、幼馴染で自分を「サヤカ」と呼び続ける長曾我部元親と、
東軍大将で、元親の友である徳川家康がいた。

「…もうお前達はいいのか」

孫市は自分の感情を悟られまいと、二人に問うた。

「…ああ。大谷と毛利とはケリをつけてきた。どういう風の吹き回しかは知らねえが、

石田は家康と停戦協定を結んだぜ」

その問いには元親が答えた。更に家康が続ける。

「元親の部下の墓参りに、お前も誘おうと雑賀荘に行ったんだが、お前は本能寺に行ったとそこの者に言われ、ワシらはここまで馬を飛ばしてきたが」

家康はそこで一度言葉を切る。

「…まさか、信長公が生き返っていたとは…」

激しい戦鬭の痕を見て、家康は思わず息を呑んだ。

「だが、それももう終わった事だ。魔王は私が斃した。それだけの事。

いつもの戦と変わりは無い」

孫市は二人の間をすり抜けようとしたが、元親に腕を掴まれる。

「…っ、何を」

「嘘付くんじゃねえよ。お前え、泣いてんじゃねえか」

「…！」

孫市の両目から、抑えることのできなかった涙が溢れ出していた。

「…離せ、元親！今泣いてしまったら、私は私でいらなくなる！」

孫市は必死に元親の手を振りほどこうとするが、碇槍を軽々と振り回す

元親の力に敵わず、その抵抗も弱弱しくなっていく。

「今日ぐらいいいじゃねえか。二代目の為に泣いてやってもよ」

元親は穏やかな口調で、諭すように孫市に語りかける。

「ワシもそう思うぞ。お前のその気持ちも分かるが、死んだ者にとつては

それは寂しいのかもしれん。その人のために涙を流すのはむしろ大

切なんじゃないか？」

家康は孫市の肩に手を置いて言った。孫市は涙を必死にこらえながら、

二人の言葉に首を横に振った。

「違う、違うのだ」

怪訝な表情をした二人に、孫市は話し続ける。

「このままでは、私は『雑賀孫市』ではなくなってしまう！

私は雑賀衆の頭領だ！なのに、今私はどうしたらいいのかわからない……！

こんな事、今まで一度も思ったことも無かったのに、なぜ今になつて……！」

孫市はもう涙を抑えることができなかった。その姿を見て、元親と家康の孫市に触れる手の力が強くなるうとしたその時。

三人の視界は、光の濁流に押し流された。

「……！」

「なっ……！？」

「これは……！？」

その光が消えたとき

「「孫市^{サヤカ}が……消えた……！？」」

孫市は、この場所から消えていた。

煙鳥翔華 雑賀孫市

一人のHEROが、戦国乱世の世から消えた。

第一話 舞い降りた八咫鳥（前書き）

これより本編が始まります。

第一話 舞い降りた八咫鳥

「…私は…」

気を失っていた孫市が目を覚ます。

（本能寺で織田信長を討ち…元親と徳川が姿を見せ……泣く姿を見られてしまった…）

苦渋の表情を浮かべて孫市は頭を抱える。

（そして…光に我らは吞まれた…が、何も起こっては…）

「っ!？」

異変に気付き、孫市は跳ね起きた。

孫市が見たのは先ほどまでいた本能寺ではなく、全方位見渡す限りの平原。

関ヶ原かと一瞬思ったが、そうでは無いと孫市の勘が告げる。

ふと、右足に目をやると、扱っていた八咫鳥 山吹（以後山吹）が拳銃ホルスターに収まっており、他に使っていた銃火器も傍らに落ちていた為、孫市はひとまず息を吐いた。

「おい姉ちゃん、いい物持ってるじゃねえか」

その声に孫市が振り向くと、そこには髪を黄色い布で縛った3人組の男が立っていた。

「ぼーっとしてんじゃねえよ。お前のその金色に光ってるやつを寄越せて言っただよ」

「そ、それだけあれば一生遊んで暮らせるんだな」

「そういうことだ、命が惜しけりやそれを全部俺達によこしな」

3人共孫市の持つ山吹を見てニヤニヤしている。3人組の頭なのか、中年の男が

曲刀を孫市に向ける。

雑賀孫市という人間は沈着冷静であるが、決して気が長く、穏やかな性格ではない。

理解し難い状況、目の前の3人の横柄な態度、あまつさえ己の誇りともいうべき山吹を寄越せと。金の為に。

孫市は 静かにキレていた。

「…いいだろう、くれてやる」

孫市は山吹を一丁頭に向ける。

「へへ、物わかりのいい「但し」」

銃声が、響く。

「私がくれてやるのは、鉛玉だけだ」

カラン、と根元から折れた曲刀が落ちる音がした。

「…は？」

呆然とする男の耳のすぐ脇を、銃弾が掠めた。残りの男達も、孫市から発せられる

怒りに立ちつくし、言葉さえ発することができない。

「私の誇りを汚すことは、私の生き様を汚すのと同義だ」

山吹を両手に構え、3人に突きつける。

「ま、待った！！すまん！何も取らないから許してくれ！！」

頭は土下座して必死に許しを請う。残りの二人もそれに倣い土下座をする。

その姿を見て、孫市は山吹を拳銃囊へとしまふ。

それを見て安心した男達は顔を上げるが、そこにはマシンガンを両手に持った孫市の姿があった。

「フフ…己の行為を否定するか…」

男達は目の前の顔を仰ぎ見て、絶望する。そこには、
「そのような生き様を、私は喜んで軽蔑しよう」
凄絶な笑みを張り付けた、鬼がいた。

平原に、幾多の銃声と悲鳴が響き渡った。

「やりすぎたか」

孫市の前には、至る所に傷を負った3人組が折り重なっていた。

「これでは聞き出そうにも、無理か」

小さくため息を吐き、これからどうするかを思案する。四方を見る
限り平原な為

どこに向かえばいいのかも分からない。

どうしたものか、と思った時、再び声を掛けられた。

「あの…少し、よろしいでしょうか…？」

今度は何事か、とため息を吐きながらその方向を向くと、見たこと
も無い装束に

身を包んだ少女がおずおずと孫市を見ていた。

「…何だ」

自分でも刺々しい言葉になっていたことに気付いたか、孫市は小さ
く舌打ちした。

「あ、あなたが天の御使い様ですか!？」

しかし、この言葉を聞き、全ての思考が霧散した。

第一話 舞い降りた八咫鳥（後書き）

…続きます。

まだまだ文字数が少ないです。

誤字・脱字がありましたら感想にて頂ければ嬉しいです。

第二話 出会い（前書き）

第二話です。

第二話 出会い

漢王朝滅び、世は混沌と欲望に包まれる。

その世を救わんとする者現れる。その者、火を噴く金色の筒を持ち、数多の戦を制する者。その者、天の智を用い乱れた世を治める者。その者天の御使いであり、それを手にし者天下を手中に収めん。

「私は占い師の予言を聞いて、流星が落ちるというこの幽州までやってきました。」

そうしたら、まだ昼間なのにこの場所に星が落ちて、来てみると貴女がいた…」

少女は孫市の手を取り、更に続ける。

「貴女が天の御使い様なんですね！さあ、私たちと共に」

「待て」

熱っぽく語り続ける少女を止め手を放す。

「え？」

「お前には聞きたいことが山ほどある。お前が言った天の御使いもそうだが、ここは何処なのか、お前は誰なのか。そして…」

「お前の目的は、何だ」

孫市は鋭い視線で少女を射抜く。

「目的…ですか？」

「そうだ。私が仮に天の御使いだとして、お前はその名を使い何を為すつもりだ？」

「それ…は…」

「答えられないか…？なら、私はお前についていく道理は無いな」孫市は冷淡に告げる。少女は慌てて孫市を引き留めようとする。

「ま、待ってください、違うんです！も、目的というか志は私たちも持ってるんですけど、人から見たら荒唐無稽というか無理だと思われるとか考えちゃって、御使い様にも呆れられると思っちゃって

だからえーと……！」

必死になっているのは伝わるが、どう言っているのかわからないのか、徐々に言葉に詰まる少女。その姿を見て孫市は

クス、と笑った。

「な、何で笑うんですか！」

「いや、すまない。お前があまりにも慌てて弁明するのでな。欲が見えるのなら不快だったが、お前は無垢だからつい微笑ましくなっていました」

「はう……／＼」

微笑みながら孫市が言った言葉に少女は恥ずかしくなり赤面して俯いた。少しの間それを見ていた孫市だったが、真剣な声色で少女に話し出す。

「お前は志があると言ったな？ならばそれを恥じることはない。人はすべて生き様を持つ。己の生き様を隠すこと、否定することこそが恥ずべきことだ」

「……！」

ハッとした表情で少女は顔を上げた。

「志は誇りだ。その誇りを誇る生き様を、我ら　私は歓迎しよう」
孫市は諭すような口調でそう続けた。少女は頭を下げて礼をいう。

「あ、ありがとうございます！あの、志を言う前に、私の名前を先に言ってもいいですか？」

少女の言葉に、孫市はこの少女の素性をまだ知らないことに気付く。いつもの自分であればそう無い事に、心の中だけでため息を吐いた。
「ああ、頼む」

少女はコホン、と小さく咳払いをし、

「私は性を劉、名は備、字は玄德。そして、真名を桃香と申します。天の御使い様、私たちの志を聞いてください」

そう名乗った。孫市は自らを「天の御使い」と言われた時と同様に

思考が霧散しかけたが、今度はその前に冷静さを取り戻した。

「（劉備…？だとするとここは1200年以上前の世界だということか…？他にも気になる点はあるが、それはまた情報が集まってからでいいだろう）一つ聞くが、お前が名前と共に言った真名とこのは何だ？」

「はい、真名というものは名前と共に持つもう一つの名前で、家族と本当に心を許した人にだけ教えるものなんです。これを勝手に呼んだら、問答無用で斬られても文句は言えないんです」

「…その真名を、まだ出会って半刻も過ぎていない相手にお前は授けるのか？」

訝しげに孫市は桃香に問うが、彼女は笑顔で言う。

「私、信じたものは最後まで信じるって決めてるんです。誰が何と言おうと、それだけは曲げないって。それが私の『誇り』ですから」
淀みない声色で桃香が発した言葉に、孫市は呆れつつもその姿勢を評価していた。どこか徳川家康に通じる点を感じたのだろう。

「そうか、分かった。それがお前の誇りなのだな」

「はい。あの、やっぱり…変ですか？」

「フ…我らは生き様をどうこうと思うことはあっても、それを否定はしない。私が思うに、お前は世間をまだ知らないが、それを知ろうとする姿勢を持っている。私はそれを好ましく思う」

不安な表情を浮かべていた桃香であったが、薄く笑んだ孫市の言葉に安心し肩を撫で下ろす。

「そして我らは、我らを高く評価する者とのみ契約を結ぶ。まあこの場合は力を貸すと言った方が良いか。まだ神の御使いについて等分からぬ事も多いが、それが私への評価なのだろう？ならば、話は早い」

「じゃあ…！」

孫市は桃香から一步下がると、山吹を拳銃囊から抜き取り

天に向け、3発発砲した。

「ひゃあ!？」

呆気にとられる桃香を尻目に、孫市は言葉を発する。

「我ら、誇り高き雑賀衆!只今より、契約の赤い鐘を執行する!響け!我らが炎の音を打ち鳴らせ!」

そう言つと孫市は腰巻の内側から小さい鐘を取り出し、空中に放り投げ、山吹でそれを打ち抜いた。

「申し遅れたが、我が名は雑賀孫市。こちらの流儀に則れば、性を雑賀、名は孫市」

山吹を拳銃囊にしまい、再び桃香に歩み寄る。

「そして覚えておけ。これは我らの心、我らが炎、我らが誇り」

孫市は桃香に手を差し出して続ける。

「我が命の炎燃え尽きるその瞬間まで、お前の力になろう」

桃香は孫市の言葉に少し慚然とした表情で言う。

「命が燃え尽きるまでなんて言わないでください!そうならない為に、絶対私たちが守りますから!」

そう言つて孫市の手を握った。

「フフ…頼もしいな」

孫市は桃香の言葉に微笑み、その手を握り返した。

第二話 出会い（後書き）

まだまだ文字数が短いです…。

誤字・脱字報告がありましたら感想フォームにてお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2898w/>

戦国BASARA×恋姫無双 中原に羽ばたく雑賀黒鳥

2011年10月9日15時54分発行